

じょうけい

真宗大谷派 至徳山 浄慶寺



お寺にもつと近づいて見ませんか
新たな近づきがあるかも知れませんが
お寺にもつと目を向けてみませんか
親鸞聖人の教えが見えてくるかも知れませんが
お寺にもつと触れ合ってみませんか
心が穏やかな安らぎに触れるかも知れませんが

11月18日(土)・19日(日)は、報恩講です。どうぞ本堂にご参詣ください。

報恩講の意味するところ

浄慶寺住職 大塚 展彦

京都、東本願寺の大学で学んでいる時にお世話になった老先生は講義の合間に何度も同じ話をされました。それは、『歌にもありますよね。仰げば尊しです。その人を思うと、いつまで経っても頭が上がらない。未熟で稚拙な自身が胸中に現出して、我が身が恥ずかしくてしようがなくなる。現在の立場では、何かと威勢を張る自分がいるけれども、あの人の事を思うと、今でも、ただ冷や汗が流れるばかり。仰ぐほかない。なぜ、こうした恥ずべき自分にあそこまで親身になっていただいたのだろうかと思うと涙が止まらない。そこに師ということがある。そこに恩ということを知る。そして、はじめて、我が身は、生涯を通して、弟子の身であることを知る。君たちは、そうした人と出遇いましたか？そうした人と出遇った人は、いつまでも青年です。年齢は老人となっても青年の心を持ち続ける。人生の完全燃焼を遂げる人となる。それを涅槃という。もはや、浄土に行こうが行くまいがもうそんなことは、人生の問題でなくなる。現在、ただ今、自身は、弟子としてこの道を全力で歩む。往生とは、このような精神の内面世界を表現しているのです』と、いう話です。

秋のお彼岸が過ぎますと、親鸞聖人の祥月命日を機縁として、本山京都東本願寺をはじめとして、全国各地の真宗寺院では、報恩講を勤めます。源氏と平氏との戦乱から長く続いた大混乱の時代に90年の人生を生きた親鸞聖人は、生涯、師である法然上人との出遇いを忘れることはありませんでした。報恩講の「報」という字には、(恩に報いる)という意味と、(恩を知る)という意味があります。恩を知るということは、どれだけ時間が経っても出遇った感動がよみがえる。また、その人との新たな出遇いを感じるという意味があります。

言葉通りに学校で教えていただいた先生をはじめ、私たちの人生の中では、自分というものをお育ていただいた方が沢山あります。そして、それは、共に暮らす、目の前の家族の一人でもあります。しかし、私たちは、なかなか、その人のことを「仰ぐ」ことができません。

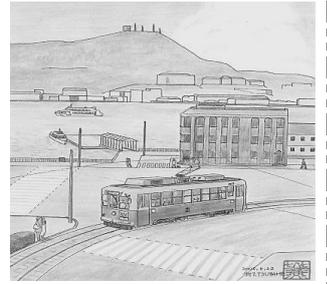
浄慶寺には、様々な年間行事がありますが、私自身をここまでお育ていただいた方を振り返る時間と場所を共にしませんか。

(※親鸞聖人の入滅については、3面をご参照ください)

体験談

長崎原爆に想う

山口 早苗



昭和20年8月9日、学校は夏休みに入っていた。私達姉妹は、家の中にいたのです。ラジオは「空襲警報解除」「警戒警報発令」と放送しています。上空を飛ぶ飛行機の音が鈍く聞こえています。突然、目を射るようなピカッとする光が目の前に飛んできたのです。びっくりした私は畳の上で、ハイハイして遊んでいる10ヶ月になる妹を片手で抱き上げ、その近くにいた4歳の妹の手を引いて、昼食の用意に忙しい祖母の近くに走って行きました。一年生と二年生の妹達も祖母のもとへ走って行きました。と、今度は地の底から響いてきたのかと思うほどの音がしたのです。『ドロドロドロドーン』という何とも言えない音がして家中が揺れて動いたように思いました。怖くなって、私達5人はワアワア泣きながら一塊になっていました。すると祖母はどこからかフツンのような物を持ってきて頭の上から、それをかぶせてバケツの水をジャブジャブかけたようです。私達、孫娘を何とか守らねばと必死の思いだったのでしよう。畑仕事から母は戻ってきました。暫くして母と一緒に家の中に行ってみました。さっきまでの家の中の様子は全く無くなり、襖や障子など建っているものは一つも無く、みんな倒れてめっちゃめっちゃになり、棚においてあったくすり等もどこかへ飛んでありません。足の踏み場もない有様です。夕方になりました。私達家族もご近所の人達と共に家の裏山の防空壕に避難しました。4歳の妹は、『見て見て、あっちの方がすごくきれいね』と指差します。そこから見えたのは、浦上方面(爆心地の長崎市松山町)の方角の空の色が真っ赤に染まり、あたり一面メラメラと燃え上がっています。たった一発の原子爆弾は、一瞬にして生きている全ての命を奪い取り、家を焼き払い、人間を焼き殺し、街全体を死の海と化してしまっただけです。何という恐ろしい事でしょうか。長崎市で一番高い山高さ333mの稲佐山の麓にある私の家、長崎市小浦町(元の私の自宅)から爆心地までの距離4.7kmです。その間には小さな山があり川があり海も橋も架かっています。こんな遠くに離れた所からでも見える程、人の血を吸った赤い火は、何日も何日も燃え続けたのです。その晩、父は帰って来ませんでした。翌日の夕方に帰ってきましたが身体中、傷になり頭に巻いていた包帯の姿が痛々しかったです。あんなに元気だった父は、下痢になったり吐血したりで、すっかり弱くなりました。戦後しばらくは原爆後遺症と言う言葉さえ無かったのです。父のような病気になった人は大勢いたのです。いわゆる「原爆後遺症」だったんでは、ないでしょうか。でも、分からないままでも家族に見守られながら永遠の別れになってしまいました。人々は二度と戦争を起こしては、いけないのです。私は皆様に訴えます。戦争を起こすという事は、全世界の人類を滅ぼし、やがては、地球をも死滅させてしまうという事を、あまりにも悲しい事を知ってほしいです。

真宗（大谷派・東本願寺）への導き

《第二回》

親鸞聖人のご生涯（その二）



安城御影

親鸞聖人83歳の姿を描いたとされる

前号のあらすじ

親鸞聖人は、今から約850年前、京都の日野の里に生まれました。9歳のとき、仏門に入られ、比叡山に登り、勉学に励まれます。29歳の時に法然上人の門をたたかれます。法然上人は、南無阿弥陀仏と称えるならば、だれも平等に救われると説かれました。親鸞聖人にはたいへんな驚きで、これ以降、念仏をよりどころとして生きていかれます。親鸞聖人35歳の時、朝廷から念仏を止めるようにとの命令があり、法然上人をふくめて8人が流罪となります。親鸞聖人も罪人として越後（現在の新潟県上越市）に流されます。

教化(きょうか)

この流罪を契機に「愚禿積親鸞(ぐとくしゃくしんらん)」と名のり、恵信尼公と結婚し、家庭生活を営む中で念仏の教えに生きていかれます。

5年の年月を経て罪はゆるされますが、しばらくは越後にとどまり、その後、関東地方にむかわれます。そして約20年にわたり、念仏の教えを多くの人々に語り伝えていかれました。

悲しみ、苦悩の多い生活を送る者にとって、念仏の教えがどれほど大切かを確かめることにもなりました。

その後、親鸞聖人は60歳を過ぎてから京都に帰られます。住居を一カ所に定めることもままならない状況でしたが、最晩年にいたるまで、たくさんの書物を執筆し続けられました。

法然上人をとおして出遭われた平等の救いの道を浄土の「真宗」と掲げ、それを後世の人々に伝えるためでした。

入滅(にゅうめつ)

親鸞聖人は1262年(弘長2年)11月28日、90歳の生涯を閉じられました。念仏に生き、浄土の真宗をあきらかにし続けられた一生でした。

完

